

しがらみがないからでできる改革で

「新しい啜」再スタート

昨年12月27日、四條

啜市長選で東修平氏（32）が再選された。初当選時、京都大学で原子核工学を学び、外務省、野村総研を経て政治経験のない全国最年少市長就任だった。当時、資金が足りなくて個人寄付を募るほどの危機感を抱えて臨んだ

東市政の1期目4年間は改革を積み重ね、なかでも公募で登用した女性副市長は、自ら0歳児からの育児体験を通しての施策提案が功を奏して、子育て世代を中心に2年連続で転

入増のまちに変貌した。各地域で

市民と市長との対話会は約150回実施。地域をくまなく歩き、市民中心の市政運営に徹した。人口増に伴う税収増に加え、行財政

政改革を進めることで、31年ぶりに財政状況は健全化した。

東市政での特筆すべき事は、早くからデジタル化に取り組み、基本指針に定めたことだ。住民票のオンライン請求、LINEによ



東修平四條啜市長

聴いていた小学生。声をかけて励ます人。多世代の市民との交流で市民との距離感はグッと近くなった。「しがらみがないからこそできる改革」を進めてきたと自負する東市長は、決意を新たにした。

1月20日、初登庁での挨拶では、「コロナ禍を乗り越えたその先、親世代・子世代・孫世代、3世代それぞれが希望を持って暮らしていける『新しい啜』に向かって、ともに歩みを進めてまいります」と市民に呼びかけた。

る道路損傷通報、職員採用のオンライン面接など、いずれも全国初の導入であった。パンデミックの渦中にあつて、この先駆的な取り組みは注目に値する。

昨年末の選挙期間中、街頭演説を熱心に